

# PSAについて

健診部 医師 長田 幸夫

PSAはprostate-specific antigen(前立腺特異抗原)の略で、近年前立腺がんの早期発見に有用なため検診に汎用されています。

PSAそのものは前立腺上皮から分泌される糖タンパクで、セリン蛋白分解酵素として作用します。すなわち射精された精液の粘ちよう度を下げる作用で、ちなみにこの状態になった精液を新入医局員が検査していました。射精された1回の精液量は約3mlで、その構成は精子約1億/ml、精囊からの液1.5~2ml、前立腺液0.5 ml、その他0.1~0.2mlとなっており、その役割は精子の保護、栄養などと言われていますが未だ不明な点も多くあります。

前立腺上皮から分泌されるPSAは、前立腺特有のものであってがん特有ではありませんので、良性悪性の間で重なる部分がありこれが難点となります。PSAはほとんどが精液中に分泌され、前立腺上皮の基底膜を通過して血中に出てくるものはごく一部です。この基底膜の透過性が増すとPSAの血中濃度が上昇しますが、その原因としてがん、炎症があり、さらに前立腺の触診や内視鏡操作、射精などがあり、また前立腺の体積が増えた状態（前立腺肥大症）も原因となります。この良性悪性を区別するためにはPSAの分子構造の違い（蛋白と結合しているものとfreeのもの）を調べたりPSAの上昇速度などをみたりもします。

PSAの値が高くなるにつれ、前立腺がんである確率も高くなっています。4.0ng/ml以上ではがんの確率が高くなりますが、年齢階層別基準値も設けられており、これによる検診も推奨されています。すなわち、50~64歳は3.0ng/ml以下、65~69歳は3.5ng/ml以下、70歳以上は4.0ng/ml以下という基準で、基準値以下でも定期的に調べてその変化度や上昇幅をみることがすすめられます。とくに父親や兄弟に前立腺がんがあると本人の前立腺がん発生の危険性は非常に高いため40歳からの検査が必要となります。従って当然ながら皇太子殿下もPSA検診を受けておられる筈です。

前立腺がんは世界的には非常に発症頻度が高く、米国では男性のがんのなかでは罹患数で1位、死亡数で2位となっています。日本においても高齢化、食生活の欧米化（動物性脂肪の摂取）やPSAの普及によって前立腺がんが増えていますが、進行が緩やかでありまた治療手段もいろいろあり、早期がんでは治癒率が高いことが救いです。臨床（外来）でみつかるがんは進行がんが多いのに対し、検診でみつかるがんはほとんどが早期がんなので、50歳を過ぎたらPSA検診を受けることが望まれます。

Sante  
Quiz

運動スポーツをしよう!の宮崎県民の合い言葉は  
「みんながスポーツ○○○○県民運動」。  
○に入る数字はどれでしょう。

- A 2013    B 1192    C 1130    D 2001**

クイズの答えをお寄せ下さい。正解者の中から抽選で7名の方に図書カード(500円)を差し上げます。ハガキに答えと、郵便番号、住所、氏名、「サンテ宮崎」をどこで見られたか、取り上げてほしいテーマ、感想などを書き添えのうえ、右記へお送り下さい。メッセージはこのページで紹介する場合もあります。応募により得られた個人情報は、当選発送のみに使用します。

切手 〒880-0032

宮崎市霧島1・1・2  
「サンテ宮崎」編集係  
協会

★答えは次号で発表します。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

★応募締切：平成25年12月20日（金） 当日消印有効